

二月の小説を読む

水野 仙

批評をするといふことは、むづかしいものであると聞いて居りました。またさう思つて居ります。如何なる主義のものであれ、如何なる傾向のものであれ、其作者に對して理解と同情がなければ、完全に其作者の作物を批評することが出来なくてはなからうかと思ひます。また評者に、確として主義なり主張なりがあつて、初めて他を評することが出来るのであると思はれます。或はこの二つを備へたばかりでなく、もつと／＼の資格が要るのかも知れません。私にはわからない。そしてさういふ資格が要るとすれば、私はそのいづれの資格も備へて居りません。他の作物を、自分の主義からのみ批評したくはない。また好き嫌ひばかりで斷じたくもない。といふと如何しても熱心な批評は出来ないことになつて來ます。私のはそれです。たとひ人は、是でもやはり批評である、或は感想であると言つてくれると否とに係はらず、私はたゞ、次のものは私の「讀後の感」であるといふことを斷つて置きます。

中央公論

●●●●●
▲眞山青果氏の「屋敷」は、恐ろしく獨り合點獨りよがりの筆つきだと思ひました。うつかりして読んで居ようものなら、何のことやら譯がわからなくなつて了つて、又二三行讀みかへすやうな煩はし

さが所々にありました。それで何やら氣がゝりな氣持ちで最後まで讀めました。それは作者が、知りすぎる程見て置いた實際の力だらうと思ひます。作者はあまりに、讀者に分たなければならぬ作の興味を、自分ひとりで味ひ過した傾きがあります。無理な願ひかは知りませんが、作者が曾つての作に揮つたきび／＼した筆にこそ、此哀愁の籠つた「屋敷」を見たいと思ひました。

●●●●●
▲谷崎潤一郎氏の「惡魔」は、頭から言つて了へばちつとも感心が出來ませんでした。此人の作といふので、持つまいとしても持つ期待が、今度のも感心が出來ないといふ失望を起させました。どうしてもせまい自分の思想や經驗から割り出して判斷するものですから、主人公の佐伯が、照子の演紙を舐め出すあたりに行つて、まさかと言つたやうな、滑稽な擔がれたやうな氣分がちよいとしました。それは併し、そのやうな可能性が私にないと言ふことであるのかも知れません。で靜に考へて見ました。そして此作に對する不満は、これらの事實を、頷かせられることの出來ない、慊らなさであるといふことがわかりました。佐伯が強迫觀念に襲はれて汽車を飛び出すあたりなども、もつとしっかり讀む者の頭を捕へて欲しく思ひました。尤も此作は、作者の意にも充たないやうのべて居られるやうですが、實のところ、書くべく佐伯なるものが、充分作者の頭にこなされて居ないやうに思はれました。筆は鋭いけれども、書き方ではなく、書かうとすることに誇張があるやう見えました。一體此作者のものには、思想ばかりが先に立つて、實際の觀察乃至經驗が、これに伴はないうらみがあるうとはいへないでせうか——それだけ此作者の未來の長く、そして大きくあることを意味して居るのです。

•

▲秋庭俊彦氏

•

▲加能作次郎氏●●●●●●

▲松本泰氏

▲久保田萬太郎氏

▲ 永井荷風氏 ● ● ● ● ●

悪いやうに書いてあるのも、さして目だゝなくて讀めましたらうに。とにかく此作は荷風氏を待たなくてもものでした。

劇 と 詩

●●●●●
▲上小劍氏のもので「辨天小僧の足」といふものを讀んでみました。あまりに辨天小僧の羽子板をいぢくり廻した疑ひはありますが、併しそれは、此作としての缺點といふものではありません。この羽子板がなけりや此作もなかつたのですから。此作が一寸面白かつたといふのは、作者の感じたことを、この羽子板によつて説明されたところにあるのでせう。だから一寸その説明が煩いやうな氣もしましたけれど、やつぱり其説明がなければ此作もないのでした。

ザ ム ボ ア

●●●●●
▲志賀直哉氏の「母の死と新しい母」は、外に白樺にある「思ひ出した事と」二つとも正直な筆を取るばかりのものでした。この前の「祖母の爲めに」の方が、少しの瑕があつた代りに、違つた面白さを認めることが出来ましたのに。

●●●●●
▲後藤末雄氏の「下町」も興味を持つて讀みました。もと／＼氏などの創作の立場は、私どもと違ふのではありますけれど、あまりに下町を自慢げに出されると、つひ何となく悪感が起きて、折角讀者が持たうとした興味を奪はれてしまひます。そして残るものは、作者が下町に持つ趣味の説明を、初めから終ひまで聞かされるに飽くことです。話し上手ではあるが、少し感情に誇張が見えます。文章も其通りで、特色があるとはいへ、筆に捕はれて筆は筆を追つて書いて居るやうです。そしてあくどい味のするものでした。尤もこの嫌らしく思ふ節々に、此人の特色を認めることが出来ますし、そこ

に作者の得意があるならば言葉はないのです。

新 小 説

●●●●●
▲田山花袋氏の「あの女」は短いだけに——と言つては失禮かも知れないけれど、そつがなくて引き締つた短篇でした。男の心持——中年の男の心持つてももの、成程そんなものかと頷かせられました。最後のインバネスの男が老妓に言つた言葉「男つて甘いもんだらう。けれどなあおい、甘いのが男だぞ。男の甘いのが本當に女には解るまい」の一句は、内容を再び繰り返した結論んぴやうな氣がしましたけれど、さてそれがどうだといふことは言はれませんでした。

●●●●●
▲小山内薫氏の「小さと」は、大川端の續篇といふことですが、私は大川端は讀みませんでした。「小さと」も可なり長いものであるのに、すつきりとした筆にひかれて面白く讀みました。そしてこれは何處まで書いてもきりがないうちに思はれました。今までの氏の作に比しては、落付きのある代りに、少し道草を喰ひたがる傾きがみえました。併し缺點といふほどの缺點でもありません。

白 樺

●●●●●
▲武者小路実篤氏の「ある兄の返事」も面白いものゝ一つでした。明快な筆で書き分けられた満足と、この一篇の思想に同情の出來た心とが、好短篇であるといふのに憚りませんでした。

【入力者注】以下の修正を加えました。（数字は底本の頁・行）

106-5 載せて居ます。 ↓ 載せて居ます。

107-17 「掛取を」書かう ↓ 「掛取り」を書かう

109-3 田山花袋氏の「あの女は」 ↓ 田山花袋氏の「あの女」は

初出…「青鞥」明治四十五年三月號

底本…青鞥 第2卷〔第1分冊〕（株）明治文献

昭和43年9月15日発行

テキスト入力…小林 徹

公開…令和三年九月二十日

[リンク…作品年譜](#)

[水野仙子ホームページ](#)